



↑ ↓ 同じ場所から撮影

消えた街角：富岡畦草・記録の目シリーズ 昭和34年 残るは名のみの江戸の橋

鎌倉扇ヶ谷上杉氏の家宰太田道灌が、武蔵台地の先端日比谷入江に接する地に、土塁を築き居館を構えたのは、二四五七年であった。それから三三年後の二五九〇年、小田原北条氏を滅した豊臣秀吉に、関八州を任された徳川家康も、この地をよしと定めて居城の建設を企てた。

そして二六〇〇年関ヶ原の合戦に大勝して、二六〇三年征夷大將軍に任じられると、江戸に幕府の設置を決定、段々と大規模な城郭の建設に取り組んだ。それには全国の大名にも負担を命じ、世にいう「天下普請」で推進した。この壮大な構想の城と城下町の建設は三代にまたがり、二六三六年外堀りの完成をもって終了したとされる。

今回の鍛冶橋は外堀りに架けられ、丸の内の武家地と日本橋、京橋、銀座辺の商業地、職人町とを結んだ。ただ、今も神田に名を残す鍛冶町はあるが、離れ過ぎることを考え合わせる時、当時職業別小集団はあちこちに存在していたのではなからうか。

この北には呉服橋、南には有楽橋、数寄屋橋があつて、ともに内堀りと外堀りの間に設けられた武家地と、海を埋め立てて造成し

た下町商業地を結んで、大都市江戸の発展に寄与した。そして二百数十年に及ぶ平和な時代を過す中で、豊潤な江戸文化は育まれていった。

しかし、国際情勢は日本の封建社会を放置してはおかからず、押し寄せる西洋の機械文明に圧倒されて、二八五四年開国、すく明治維新、清・露大國との戦争、関東大震災と翻弄されながら、第二次世界大戦に突入。結果は敗戦、折角の江戸東京も灰燼に帰した。

そうして、占領軍政下の復興作業で、外堀りは容赦なく瓦礫の捨て場として埋め立てられ、昭和十三年から十年程でほとんど消滅した。それでも東京に歴史的地名が残ったが、昭和四十年代高度経済成長に伴う近代合理化で、町名まで多くが消滅、有名な橋の名は、辛うじて近くの交差点に名をとどめることになった。

写真の干された鍛冶橋の下の空洞は、時期小映画館に利用されていたが、これも映画の衰退とともに消えた。その後昭和末期には、国鉄京葉線の地下東京駅建設で、完全に様変わりした。

(昭和三十四年六月二十二日 富岡畦草撮影)

文 富岡畦草(とみおか けいそう)
大正15年8月、三重県生まれ 日本写真協会、日本写真家協会、自然科学写真協会などの会員



(平成17年7月19日撮影)

この写真は、東京・鍛冶橋の交差点を撮影したものである。右側の建物は、2001年11月に竣工した「パシフィックセンチュリープレイス丸の内」。総ガラス張りの外観と香港資本の企業による不動産プロジェクトということで話題となった。左側の建物は、「東京ビルディング」で「丸の内再構築プロジェクト」の一つ。東京駅丸の内駅舎の未利用容積の一部を使用する「特別容積率適用区域制度」(高度利用を図るべきと認められる区域を都市計画で定め、当該地区を全体として捉えて未利用容積の有効活用を図る制度)を適用。移転容積分を加えて今年10月に竣工する。

(文:渡辺邦博)